
いくじなし

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いくじなし

【Nコード】
N3345T

【作者名】
小野 大介

【あらすじ】
夜、家路を急いでいると、前方から悲鳴が……。

（前書き）

なによりもまず、自分を大切にしましょう。自分を……。

残業を終え、家路を急いでいたときのこと――

外灯の明かりだけが頼りの夜道を歩いていると、突然、耳を劈く悲鳴が上がった。

一人の女性が全速力で駆けてくる。

外灯の明かりに照らされ、浮かび上がった彼女の顔はひどく強張っており、切羽詰まっているのがハッキリ見て取れる。

「キミ――」

何事かと思い、声をかけようとしたそのとき、明かりから女性が消え、代わりに一人の男が浮かび上がった。

「――」

その姿を目の当たりにした瞬間、驚いて言葉を失い、思わず道の端に寄った。

まもなく女性が目の前を横切った。その刹那、恐ろしい形相を浮かべた男が、その手にキラリと光るものを握り締め、通り過ぎた。

それは出刃包丁だった。

外灯の下を抜ける度に、刃が鈍く光っていた。

二人はあつという間に見えなくなった。声も聞こえなくなった……。

……

「うう、いくじなし……！」

咄嗟に動けず、助けられたかもしれないのに助けなかった自分を貶しながらトボトボと家路に就く。その足取りは重たい……。

後日――

また、残業終わりに夜道を歩いていると、また、耳を劈く悲鳴が上がった。

「また……！？」

いつぞやのように、前から一人の女性が走ってくる。同じように

全速力で駆けてくる。そして、その姿が外灯の明かりの中に浮かび上がった。

別人だが、その顔はひどく強張っており、同様にうろたえている。

「つつ、次こそ……！」

もう見捨てたりしない――

そう自分に言い聞かせ、気持ちを奮い立たせる。勇気を振り絞り、待ち構える。

そのとき、明かりから女性が消え、代わりに一つの影が浮かび上がった。

「！？」

それを目の当たりにした瞬間、飛び上がらんばかりに驚いた。腰が抜け、その場に座り込んでしまった。

すぐ横を女性が走り抜けた。その刹那、真つ黒なローブを身にまとったガイコツが足音一つ立てずに通り過ぎた。三日月を思わせる鋭利な刃のついた草刈り鎌を両手で握り締め、振り上げている。

通り返る際、眼球の無い二つの穴でチラリと見られた。

「ひいっ！」

恐怖で思わず声を漏らした。

外灯の下を抜ける度に、三日月が怪しく輝いていた。

女性と、それは、あつという間に見えなくなった。

ギヤアアアアアアアアアアアア—— ツツツ！

それからまもなくして、闇の彼方から断末魔の如き悲鳴が上がった……。

「ひいひいひい……」

その身を震わせ、弱々しい声が漏らしながら、一目散にその場から逃げ出す。腰が抜けているので四つん這いになり、這って逃げ出した。

「いくじなしでいい……！　いくじなしでいい……！」

その間、しきりにかぶりを振りながら、何度も何度も、自分に言い聞かせていた。

それ以来、その道を通らなくなった……。

（後書き）

いかかでしたか？　楽しんでいただけたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいで、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3345t/>

いくじなし

2011年10月9日01時50分発行